

事業報告書 団体名: にこにこあおむし人形劇団

事業名	みんなで作る人形劇
【当初計画の事業目的(取組課題)と実施効果】	
にこにこあおむし人形劇団では3年間に渡り、社会福祉法人ともかわさき日中一時支援事業所ひらまにて、人形劇ワークショップを行った。また障がい者余暇事業でのワークショップ講師としても活動を行ってきた。通常、場の余暇活動内容を考えるのは職員であり、月に一度、ましてや日々となると、その内容を考えるのは大きな負担となっている状況がある。何か良いものはないか、ヒントはないかと探してもなかなか見つからない、見つけても具体的に実行ができないという現実もある。 「障がい者余暇時間の内容」は長い間問題視されている。そもそも楽しみを選択できず、テレビ・タブレットをあてがわれ、それを見るだけの時間を「楽しんでいる」という評価をする場もある。 彼らには無数の可能性があり、「人生を楽しむ」ということを実感したり、「楽しみを選択する」という権利がある。それを余暇活動でスタッフ、利用者の皆様が少しでも感じ、実行する時間を作りたいという思いで、今回の事業に取り組もうと考えている。 人形劇を作る過程はたくさんある。体験していく中で参加者の新しい可能性を発見することがあり、そこから生まれる個々の創造力は無限に広がっていく。あまり身近にない人形劇の世界を、場を作り上げている方々にも体験していただき、日々の活動を広げていくヒントになるような時間としていく。「ひとつでも多く楽しいことを」をモットーに、人形劇を通して一緒に楽しいことを探しに行きたい。	

【実施結果(成果)】	
・特定非営利活動法人わになろう会 2024 年 8 月 7 日(水)13:30~15:00 川崎市立中央支援学校 体育館 講師 2 名 参加人数 41 名 スタッフ 17 名 学生手伝い 4 名 ・社会福祉法人はぐるまの会 第1回目 2024 年 10 月 19 日(土)13:00~15:00 はぐるま共同作業所 みらぼホール 講師 2 名 参加人数 14 名 スタッフ 4 名 学生手伝い 2 名 第 2 回目 2024 年 11 月 9 日(土)13:00~15:00 はぐるま共同作業所 みらぼホール 講師 2 名 参加人数 12 名 スタッフ 3 名 学生手伝い 4 名 ・NPO 法人チャレンジサポート プロジェクト 第1回目 2024 年 10 月 26 日(土)14:00~16:00 グループホーム2階 多目的室 講師 2 名 参加人数 7 名 スタッフ 5 名 第 2 回目 2024 年 11 月 16 日(土)14:00~16:00 グループホーム 1 階 多目的室 講師 2 名 参加人数 9 名 スタッフ 5 名 学生手伝い 1 名 プログラムは当初の予定通りであるが、全て状況が違いためアレンジを加えている。1 回の方は、人数も多かったため短縮したプログラムを作成。2 回の方では、参加者の皆様の何が 1 番楽しいと感じていることをその場で瞬時に判断し、会場を飾るアイテムや小さなパネルシアターを作る、など少しアレンジを加えた。	

【実際の効果と課題】

ワークショップの規模や内容は、計画時に想定していた通りとなった。

回数にして 5 回、人数も会場も大規模・中規模・小規模と多様であった。しかし、根底にあるものはどれも一緒に、「個々が自分の力で体を動かし、声を出し歌を歌い、周りとも関わり合いながら人形劇を創り上げる」という我々の目指していたものとなった。

大規模会場で開催した場では、始まるまで床に転がって反抗していた子が、会が始まると自分の名前を呼んでくれるのを待ち、自分の人形を楽しんで作っていた。このようにどの場においてもいられなくなる参加者はいなかった。

当該プログラムは、1 人 1 人に対して、短くてもスポットを当て、やる気を出してもらう為に様々な工夫をしている。

- ① プログラム内容の導線をしっかり決めてあり、その上での即興性、突発事態、発語に応じる柔軟な姿勢を保つ
- ② 劇に必要な動きや歌の練習をするが、ファシリテーター森の誘導と音楽や効果音を谷川が鳴らすことにより、参加者は目にも耳にも体にも常に刺激があり、集中の途切れる隙を与えない。
- ③ 絵を描いたり、人形を作成する時間は、創作的で緩やかな時間となる。
- ④ 練習した動き、歌、自分の作成した人形と共に 10 分～15 分の本番を迎えることで、最後には達成感を味わえる

ワークショップの間は、常に参加者同士が仲良くしていたり、一緒に動作をしたり、和やかな空気だった。またスタッフの皆様も一緒に楽しんでくださり、施設内での余暇活動支援となった。

具体的な効果について アンケート統計結果など客観的な資料

参加者は言葉でのやり取りが難しい人々のため、施設スタッフのご意見と各回のお手伝いの学生達の意見をまとめる。この意見より、このワークショップで、場に合った新しい余暇の時間の過ごし方の提案ができたと考えられる。スタッフの皆様にも良い影響や刺激があり、ボランティアで参加した学生の新しい視点、視界が開け、貴重な体験を得ていただくことができた。場そのものにも新しい風を吹き込めたと確信している。

【スタッフのご意見】

1. 当施設で外部の方を招いたプログラムを利用者向けに土曜日という日程で行ったのは今回が初めてでした。言葉の無い仲間たちがその時間を参加することが出来るのか不安でしたが、支援スタッフを配置することで無理なく実施できたと思います。大学生による演奏は+αで組み込まれた内容でしたが演奏を聞くという時間とても良かったです。地元につながりのある学生がいることも分かり、はじめての試みでしたが、新たなご縁を築けたため実施して良かったと感じました。
2. 当施設として、利用者向けの活動内容として外部講師を招いて半日の時間枠を使って活動するというのは、2 回目ということで、利用者はその時間に参加し、スタッフはその参加を支援するという分かりやすい分担と目的で行うことが出来ました。支援員がその時間枠を目いっぱい使って企画から内容まで考え、さらに利用者の興味関心をひきつけながらその時間を進行するということは、スタッフに一定以上のスキルを要します。今回は講師の方の進行力と大学生による演奏も合わさって、利用者の満足度の向上とスタッフが安心して利用者の参加を支援する役割に集中できたため、活動内容に関する共感も得られたと実感しています。
3. 今回のような利用者向けの活動以外にも、地域に住まう方(子どもたちなど)に参加を募り、参加を希望した仲間と同じ時間を共有するような試みとして範囲を広げた内容を企画しても福祉施設としての活用の範囲が広がり、良い試みになるのでは思いました。
4. ふだん事務をしているので、ホームにはなかなか顔を出せなかった。どんな方がどのようにホームで過ごしているのか、どんな表情をするのかを見ることができた。
5. 毎日一緒に過ごすスタッフでも、参加者の特性を深く知る機会は少ない。その中でみんなが絵を描いたり歌を歌ったりするのを客観的に見る機会となり、とても良かった。
3. 日々の生活の支援で 1 日はすでに予定でいっぱいとなり、今回のような余暇を楽しむ機会がなかなかなかった。充実した午後も過ごすことができた。

【大学生ボランティアより】

- ① 普段中々接することがない方々と直接触れ合うことが出来とても勉強になった。この体験を通じて、自分が持っていた偏見や無知に気付くきっかけになった。利用者の方々が自分のペースで日常を楽しんでいる様子を見て、嬉しかった。コミュニケーションがうまく取れなかったり、どう行動すればいいかわからない場面もあったが、2回経験すると苦痛と感じなくなった。自分自身の成長に確実に繋がった。
- ② 障がいを持つ人と関わるのが初めてだったので、少し緊張した。話してみると、皆さん素直に受け止めてくれて、楽しかった。このワークショップを経験して、このような活動に興味が出てきた。
私たちが普段どれほど当たり前と感じている「できること」が実は人それぞれなのだと実感した。障がいに対する偏見や誤解を減らしていくべきだと思った貴重な体験だった。
- ③ 中々障がいを持った方々と関わるのがないので、貴重な経験になりました。皆さんが喜んでいる表情を見ることができ、こちらも嬉しい気持ちになり自然と笑顔になった。

事業実施のプロセスにおいて生じた課題及び今後の展望

☆反省点は主に現地のスタッフ達との打ち合わせが不十分だったことである。

これは大規模になればなるほど、注意しなければならない。時間がない中、お手伝い箇所を簡潔に伝える方法を工夫していきたい。これはひいては、スタッフ自身にしっかり立ち位置を把握してもらうことにより、より一層参加者との相互理解を深めることができるのでは、と期待するところである。

☆今回の各回ワークショップには手伝いの学生が参加できたことは大きい。

彼らは全員、音楽大学の学生で、自分の専門楽器のほかに、教職科目を履修している。教職の履修単位の中に、介護体験、介護実習、教育実習が課せられており、ある時期になると実施されるが、学生自身の希望で貴重な体験をさせることができた。(感想別紙)若い人たちがもっと多くの体験や実習を通し、彼ら自身の人間形成に役立ち、社会を担ってほしいと期待する。